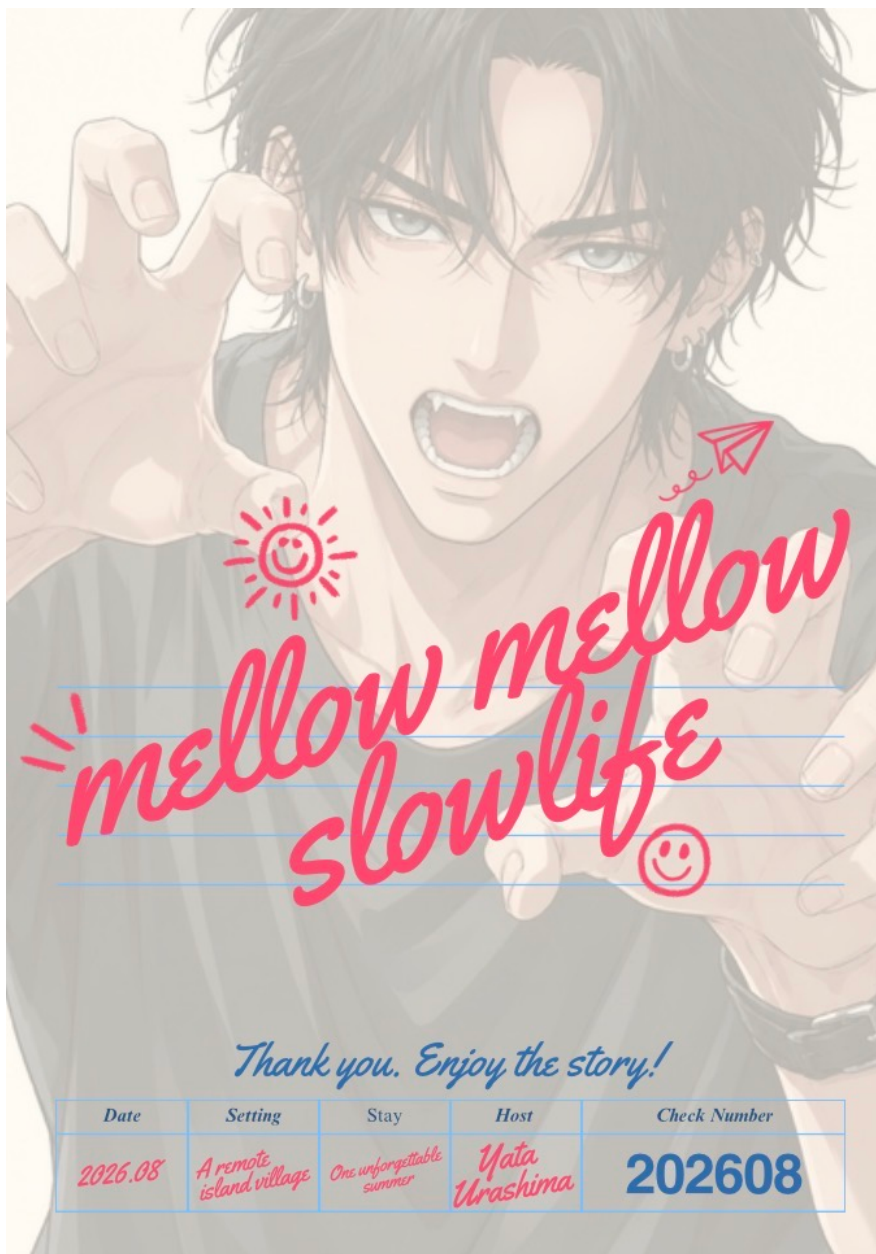


mellow mellow SLOWLIFE♡



SAMPLE

# 1. 神さまは鰺が好き

世界が普通に続いている、夏の昼下がり。

波が、ざざん……と海岸の岩肌に叩きつけるたびに、白く弾けている。幼い頃短い期間住んだだけの、辺鄙な島にある断崖絶壁の縁。

そこに今、私は立っていた。

一張羅のTシャツとデニムパンツは大切に着ているけれど、山道を登ってきて汗だくで、背中や太ももに纏わりつく。

なかなか買い替えることができなかった古ぼけたスニーカーのつま先で、砂利を掻くたびに小石が乾いた音を立てた。

それが崖の縁からぽろぽろと下へ零れ落ちていくさまは、スローモーションのような錯覚を起こす。

ああ、死ぬ時ですら、こんな格好なんだなあ……。

……一度でいいから、ちゃんとおしやれ……してみたかったな。

その昔、おぼろげにだけど、たった一度だけこの縁に立ったことを覚えていた。

それ以外のことはほとんど覚えていないのに、ここからの風景だけは記憶に残っている。

ここは、なんだか安心する場所として覚えていた。

安らかに旅立てるだろう、という安心感。

——短い人生だったけれど、思えば……お金を払ってばかりだったな。

両親が離婚したあと、母は「高校を辞めて働いて」と言った。

あの日から私は、ずっと母の借金を払い続けている。

働きながら高認をとり、返済と仕送りを条件にようやく家を出て……大切な人も出来て、やっとこれからだと思った矢先だった。

——…大丈夫だった？ 田舎のお母さんは  
連絡を確認しながら、床に落ちているゴミを拾う。

——…わからない。もうもぬけの殻だった。島の人が言うには、男  
の人と夜、軽トラで少し荷物積んで出て行って、そこからもう四週間  
帰ってないって

私の実印を作った母は、勝手に私を連帯保証人にして、かつてわずかな  
期間住んだこの場所に、小さな安い中古の家を買っていた。

——…もう、この家を…断捨離するので、いっぱいいいで

——それは辛いな……。俺じゃ何も力になれないかもしれないけど、  
話は聞くからね

合間に、まだ付き合い始めて日の浅い彼氏とやり取りをしながら、ゴ  
ミ屋敷と化したそこを片付ける。

そこに残されていたのは、私に宛てた母からの「ごめんなさい」とい  
う手紙だけ。

三日、片付けた。三日だ。

有給休暇は有り余っていたので、ここぞとばかりに使わせてもらったが、出来ることなら自分のために使いたかった。

洗濯したかどうかともわからない原色系の服の山と、クローゼットに詰め込んだこれまた服の山を、ゴミ袋に詰める。

シンクにはゴミが溢れ、そして放置された虫の死骸。

宛名が私の名前になっている、身に覚えのない大量の滞納通知書。

そしてそれらを愚痴っていた二日目の夜あたりから、彼氏から返信が来なくなった。

『大変なときに本当にごめん。やっぱり……一緒にやっていく自信がなくなった』

そう一言メッセージが入っていた三日目の朝、彼に電話をかけた。……ら、ブロックされていた。

いろいろな考えが巡ったけれど、……うん。

まあ、こんな有様じゃ……、当然か。とも思う。

つけているマスクを浮かそうとして、やめた。

スマホの電源を切り、クソでかいたため息をついて、ぐっと天井を仰ぐ。

……たしかに、逆の立場だったら、……私だってこんな相手はごめんだ。

シーリングライトカバーの内側で、小さな羽虫の死骸達が斑点をたくさん作っている。

「……あー……喉乾いた……」

脱力感が追いつく前に玄関へ向かおうとして、足がもつれる。

「あっ……!」

まだ手付かずだった埃まみれの床に突っ伏して、だんっ、と手をついた。

倒れ込んだところから、これまで死角になっていた、散らかった隅が見える。

アルコールの缶、コンドームの空き箱。

よくわからないティッシュの山、大量の薬。

「……ッ」

——……ああ、もう。本当に、どっかで、私の知らないまま、野垂れ死んで。

情けなくて、絶望感だけが漂う。

涙も出ないくらいに、家の中が臭くてしょうがない。

「……う、お、え……！」

ぞわぞわっと体が震えて、えずく。

はあ……、もう、本当に……本当に！ 嫌だ……無理……。

……ああ、違う。私だ、私が……。私が私を、終わらせればいいんだ。

—— ゆっくりと崖の縁に足を進める。

かた……かた……、と足が竦み、止まってしまったことに自分で驚いて、そしてまだ生きることが諦められない本能に、嫌気がさした。

だけでもう、後戻りできる場所なんてない。

その場でそっと、心を落ち着かせるべく目を閉じた。

……ああ、思っていたより……死ぬの……怖いんだな、私……。

—— そう思ったときだった。

ぱち、ぱちぱち、ぱち……じりじり……。

背後でなにか爆ぜる音がしていることに気がついて、目を開けた。

……ん……？　なんか……ん……？

ふわんと目の前を水色と真っ白を混ぜたような煙の筋が通り過ぎて消え、そして、すごく、すごく……。

——え……、いい、匂い……！　魚の焼ける……匂いだ……！

……てか、なに、なに!?

——バツッ！　と首だけで振り向くと、三メートルくらい背後で、Tシャツにハーフパンツにサンダルというラフな格好をしたデッカイ男が、一人でアウトドアチェアに腰掛けて、魚を焼いている。

「……は……？」

この……今起こっていることの意味がまったくわからなかった。ふらっ……として、視線の先に一瞬崖の下が入り込む。

反射的にヒュッ！　と恐ろしくなり、その場で腰を抜かした。崖の縁に足先が飛び出してしまい、パラパラと小石が落ちる。

「ひ……、ひゃあっ!!」

足を思い切り引くと、縁にスニーカーのかかとが引っかかった。スポンッ！　とそれが脱げて、崖の向こうへ吸い込まれていく。

「あ！　……ッ！」

ぺたんと座ったまま、もう一度魚の匂いの方向へ振り向いた。

男はぼーっとこちらを見つめて、それから、「あ」と何かに気がついたように短く声を出した。

「あ……、どうぞ。降りようとしてましたよね？　どうぞ、続き」

「……え？」

どうぞどうぞ、と右手で先を促すような仕草をしている。

思わず、首を傾げた。

「え？　あ、いや、死ぬんでしょ？　いるいる。よく……都内ナンバーの車。この山の下に、駐車場あったでしょ？　あそこに車打ち捨ててさ。いるんですよ。そのへんからくるやつ。アンタでしょ？　ごめんね。気にせず、どうぞ。俺はさ、あのー、ここ、使いたいからさ。だから空気だと思って。どうぞお構いなく」

まばたきを何度かして、考える。

えっと……、これは、飛び降りることを、勧められて……いる？  
ぽかんとしたまま言葉を失っていると、男が顔を顰めた。

「……だから、今日は！ 俺ここで焼くって！ 決めてたの！ ア

ジ！」

「は……!? ええ……!?」

急な勢いのある主張に捲し立てられる。

彼が手に持っているのは、バケツ。

その中から素手で引っ張り出したのは、たしかに新鮮な鰺だ。

「ほらその、ツガイ岩。見える？ アンタのそこから、まーっすぐ、  
あ、ちよい右寄りに」

指差した海の向こうへ促されるまま視線を移すと、たしかに沖の方に  
大きめの岩と、それより一回り小さな岩が二つ浮かんでいる。

注連縄で繋がれたその二つは、『ツガイイワ』というらしい。

「こお〜れがいいのよ。酒飲みながらここで魚焼いて、そのツガイ岩眺めるのが」

そう言って缶ビールをクーラーボックスから出した男が、シュコ、と音を立ててそれを開け、ごきゅ、ごきゅ、と音を立てて飲み出した。

天を仰いだ横顔をよく見ると、整った目鼻立ちはまるで神様が計算し尽くした完成品で、それを無遠慮に日焼けさせているところが、傲慢で自信家ないかつさを写しているようだった。

汗が滲んでいる太い首筋が、弾むように喉仏を上下させている。

……なんだか見てはいけない艶めかしい姿な気がしてきて、一度ぐくりと息を飲んでそれから、視線を海の方へ戻した。

——……ていうか、なに、こいつ。

「……降りないの？」

もとい。ノンデリだ、こいつ。

「たっ、タイミングがあります」

「あ、そう」

「す、すぐ飛び込みます、すみません邪魔して」

「いえいえ。ごゆっくり。お構いなく」

涼しい顔で眉を上げて納得したように頷いた男を凝視した。

——…マジでなんなの。お構いなくってなんなの。

「……人生最後の日だし、タイミングは自分で決めたいんです。空気で急かすの……やめてください」

「あーたしかに？ 死ぬ機会なんて、一生に一回しかないよなあ」

男は半笑いを崩さずに、金串に刺した鰭でこちらを差した。

「けどさ、別に早く飛び込めとは言ってねーじゃん。お構いなくどーぞって言うてるだけで」

だんだん、声色の無関心さに苛立ってくる。

「だ、っ……！ だからそれが急かされてるみたいで、いま飛び込んだらあなたに従ってそうしたみたいで癪なんです！」

「は？ うざ！ いやいや幫助ほうじょしてるつもりねえよ。あんたが選ばうとしてる道だろ？ 巻き込むなよ、知らねえよ」

そう言って缶ビールをもう一度あおった男を睨みつけた。

ごきゅ、ごきゅ、ぷっはー！

「うっ、……めえー！ はあ、これぞ生なまきる醍醐味だいごみ！」

……わっざとらし……むっかつく……。気が散るし……。

でもやっぱり、早く飛び降りなければならぬ気がして、変な汗が滲む。ちよっと追い込まれてる感じだ。

スニーカーも、先に行っちゃって片方ないし。

その場で小石を見つめて頭の中が真っ白になっているうちに、彼はまた声をかけてきた。

「……まーけど、そのさ、断崖」

「……はい？」

「あのー、そこね、地元のやつしか知らねえんだけどさ、その……真下？ 少し出っ張ってんのよ。さっき落ちた靴、そこじゃない？」

身を乗り出して見ようとしたけれど、もうなんというか、怖くてたまらなくてこれ以上体が動かない。

「落ちてすぐにね、大体のやつがゴッ、てまずぶつかって、まあそこで？ うまいこと意識イッチやえば痛みも一瞬かもだけど、そこから、あー海面が……待ってるじゃん？ そこね、潮の流れなのかな？ 渦巻いてるっつーか……多分溺れてる間に何回かそのボッコボコの岩場につかってさ、まあそこで？ うまいこと意識イッチ」

「——ああ!! もういいです、わかりましたからッ!!」  
言わんとしていることがなんとなく伝わってきて、苛立ちが先に立ち  
思わず遮るように叫んだ。

崖の手前にある山の中の鳥が、何羽か飛び立っていく。

カリッと音を立ててアジの背中をかじった男が、「ほあ？」とこちらを見た。

だめ、もうその無関係な表情、泣きそうなんだけど。

「……下唇出てるよ、大丈夫そ？」

「……う、うるさいなあッ!!! 元からこういう顔だもん！ い、色々あってもう嫌なの！ もうこんな世界、最後の日にするの！ 絶対飛び降りる！ けどちょっと待って！ せっかく美味しいアジ食べるのに私みたいな辛気臭いやつが風景とか嫌なんだと思うけど、待ってよ、待って……。こんな……こんな所に来てまで、他人に人生決められるの、やだあ……！ もう、やだあ……！」

言っている途中で遮られたくなくて、べしよべしよと涙を流して、鼻水も垂らして捲し立てた。

絶望の中で思考が詰まり、酸欠なのかぐわんぐわんと頭が痛い。

もう考えることもやめたくて、この人誰なのかわかんないし、なんだか死ぬなら早く死ねって言われてるみたいだし、でも痛いけど大丈夫？ そんな勇氣ある？ って試されてるみたいで、もうやだ……！馬鹿にされて、『やっぱり怖いんじゃない』と大笑いされることを覚悟した。

けど知らない人だし、恥なんてない。  
もう何と思われてもいい、別に。

「……だから邪魔じゃねえから、別に。そんな大事なこと、迷うだけ迷えばいいだろ。……てか、まあ、普通に怖いよなあ」

それはこれまでの気だるさが含まれる声でも、苛立ちを抑えた声でもなかった。

穏やかで、思いやりが混じっている……気がした。

「……けど、んー……そうさねえ」

っしょ、とアウトドアチェアから立ち上がった男は、思っていた以上に大きくて、身長がとんでもなく高かった。

「……人生最後の日、かあ。んー……じゃあそれ、延長してくんな  
い？ 今日一日、俺にちょーだい。ね」

ゆっくりと向かってきて目の前にしゃがみ込むと、やわらかく視線を  
合わせてくる。

「……何があったか知らねえけど、こっちきて座りな？ アジ好き？」  
白い歯を見せて笑った口元からは、少しだけ鋭そうな犬歯が覗いてい  
る。

さっきから、すごくばかなことを思い付いていた。

思えば、真後ろに急に現れたこの人は、いつからここにいたんだろう、とか。

私以外には見えない、助けてくれる存在がとびきりかつこいい大男に姿を変えてるだけじゃないか……みたいな。

……それにしては、鰻に執着してるし見た目もリアル過ぎるから、多分違うんだろうけど。

「そーんなかわいー泣き顔でさあ、海の藻屑になるなんてもったいねーよ。それにほら、こんなに……今日は、天気もいいしさ」

天を仰いだ彼が笑顔のまま、眩しそうに片目を閉じた。

もう片方の虹彩が夏の光を吸い込んで、透き通るようなグレーに近かったそれが、とろけてしまいそうなアンバーに見える。

——……やっぱりこの……ひと、人間……、じゃないのかな。

「か、……」

「か？」

「……神、さま？」

聞くと、男は一瞬ぽかんとして、もっともつと笑った。

「ははっ！　そうそう！　実は俺、この山のね、守り神なのよ。八咫<sup>やた</sup>サマとお呼び」

なぜか語尾だけオネエ口調になったのを笑えば、釣られたように彼もまた笑う。

「……でもあの、神さま」

「ウン。八咫サマね」

「あの、やたさま」

「あ……イイな。……じゃねえや、ハイ。なにかしら」

「……あの、実は」

「……なによお、もったいぶってないでさっさと言いなさいよお」  
……立ちあがろうと……、さっきから何回もしているのだけど。

「実は、あの、こ……、腰が……、抜けちゃったみたい」

そう言うと、大男はまた一瞬からっぽの表情をこちらに見せて、天に向かつて大笑いした。

「あつはつはつはつは！ やっぱり飛ぶのはさ、明日にしよーぜ！  
けってーい！」

そう言うなり、神さまはひょいと私を担ぎ上げたのだった。



「……ふーん。そっか……。んで、母ちゃん逃げちまったってわけか」

「そう……私に残ったのは膨れ上がった多額の借金と、ローンが丸々残ったままの、汚いゴミ屋敷だけです」

「で、それを売っぱらう為に掃除してるつつーのに、彼氏は慰めもせず。ひでえ話だな」

「……まあ、そこまで私のこと、好きじゃなかったんでしょね。」

あー、また死にたくなってきた」

「あら、アゲインしちゃった。死にたくなってきたアゲイン」

あのあと断崖の入り口では、ふたりしてツガイ岩を眺めて、こんがり焼いた鰺を一匹いただいた。

流石にお酒は遠慮した。

ミネラルウォーターを譲ってもらって、空きっ腹に鰺をおさめる。

彼ははらわたや頭まで、「命に感謝」と言いながら、その全てを平らげていた。すごい。

彼は、この島に残された曾祖父の家を譲ってもらい、以来この島に住んでいる人なのだそうです。

「いや人じゃないよ、俺。ちがうよ？ 神さまよ？」

「あー、そーでしたね、やたさま」

「だんだん設定守んのめんどくなってるじゃん」

しばらく話していると、いつのまにか空が赤くなっていった。

空と海は、一瞬一瞬違う色で、違う音だった。

「……あー……なんか……」

「なー。いーい星だよなあ……」

みなまで言わずとも、私が思ったことを先回りして口にした彼を見る。

……なんだか、不思議な人だなあ。確かに人外みはある……。

その横顔が綺麗で思わず見とれていたら、視線がこちらに移った。

「なあに」と目を細めて妖艶に微笑まれる。

なんにも言葉が思い浮かばず、首を横に振った。

……ていうか……私、なんで身の上話なんて……。明日死ぬのに。

そんなことを思っているうちに、彼が立ち上がる。

「……ま、とりあえず、降りるか」

そう言って、片付けをし始めた。

ソロキヤンググッズ一式のようなセットは、手慣れた手つきであつという間に一つのリュックに納まった。

こちらに向けられ、「背負える？」と頼まれたので頷き、思ったよりも軽いそれを背負う。

それから、彼は私の前で背を向け、スツとしゃがみ込んだ。

「……えっなに」

「あ？ なについて、おんぶだろ」

「さ！ さすがにおんぶして下山は神さまでも無理なのでは……」

「大丈夫大丈夫。片っ方裸足じゃ怪我するし、それにそもそも、歩けるほど元氣もねえだろ。いーから。ほれ」

……立ち上がると、たしかにこれまで自覚していなかったけれど、まったく体に力が入らなかった。

「……おねがい、します」

「……おう。おいで。帰ろ」

彼が背中を向けてくれていて、よかった。

なんだか、急に何か幼い頃の辛い思い出を引き出された気がして、泣きたくなってしまったから。

それが一体何なのかまでは、はっきり思い出せないけれど。

リュックを背負った私を、軽々しくひょいっとおんぶした彼は、崖のある山をゆっくりと降りていった。

降りる間、背中の大きさや……その熱さを感じ取る。

とたんに、周りで騒ぐひぐらしの鳴き声が遠く感じた。

微かに響いてくる彼の鼓動はとんとんと規則正しい。

Tシャツから放たれるぬくもり。男の人特有の、汗の匂い。

夕暮れに染まった景色の中で、彼の背中に……そっと寄り添った。夏の葉を張り巡らせた梢が、微かに腕を強く掠めてヒリッとした。

……あ、ちゃんと痛い。私、生きのびてしまってる……。  
……暑いけど……。この人の背中も熱いけど……。気持ちいいな……。

「おい、ちゃんと掴まれ。落ちんなよ」

「……はい」

「……ん」

なんだかすべてのことを赦してもらえた気がして、ぎゅうつとより強く、その体にしがみついた。

山を降りてすぐの駐車場には、すでに待機している車があった。

運転手である初老の男に、「——羽柴さん、俺んちね」と頼んでいるその横顔を見た。

うまく言えないが、「かしこまりました」と答える運転手の静かな声から、長年仕えてきた者ならではの忠誠心が感じられた。

横で「あー涼しいー！」とTシャツをパタパタさせるその姿は、もちろん神さまではないかもしれない、だけど。

なんだかどうにもさつきから只者ではないという雰囲気を感じる。

「……あ、えーと……私は、帰らないと……」

運転席に向かってそう伝えた。

「あれ？ 帰んの？ すげ。チャレンジャーじゃん。寝れんの？ あんた名義のゴミ屋敷」

……それを言われてしまうと、蕁麻疹が出そうな気がしてきた。思い出して吐き気がして、ふるふると首を横に振る。

「あー……やっぱり今は、帰りたくないです」

捉え方によってはまあまあすごい言葉を思わず発してしまった気がするが、彼は湿度なく頷いた。

「だよな？ 使っていない部屋もあるから、今夜はうちに泊まれよ」話をしている間に、大きな庭付き平屋の一軒家に車が入っていく。

古民家だが、大切に使われているという趣が感じられた。

外観がとても好きだったから、内装だけをリフォームしたと彼は笑う。

「ほら、つかまれ」

「え」

靴を片方しか履いてないので、彼はわざわざ車から下ろすときも私を抱っこしてくれた。

こんなのぜんぜん、ケンケンで行くのに。

とても大切にされている気になってくる。

こんなによくしてもらえると、明日死ぬのに未練が残る。

……こういうの、……すごく、よくないよ。

傍に目をやれば、庭からつながるガレージには、車が二台納まっていた。

そして、平屋の大きな玄関の引き戸を、彼が開く。



「どこにもいくにも履いてて……。これしか、持ってたから」  
静かに、玄関の段差に下ろされた。

彼が目の前で一段下のたたきにゆっくりとしやがみ込んで、視線を合  
わせてくる。

「……そっか。じゃあ、明日新しいの買おうな」

「え、そんな……。い、いらない……。ですよ」

「じゃあどうやって明日行くんだよ。裸足で？ 足裏めちゃくちゃ痛え  
と思うぞ。明日飛びに行くんだろ？」

「あ……。そっか……。たしかに……」

「……ま、心変わりして明日あの崖に行かなかったとしても、どっちみ  
ちいるだろ。この片っ方が、今日までのお前の肩代わりをしてくれたと  
思えばいいんだよ。今日の分、代わりに飛んでくれたの。な？ だか  
ら、今生きてるお前は、たった一日でも、新しい靴を履くんだ」

目線を合わせてそんなことを言われたら、なんだか込み上げてくるものがある。

彼はそれを見ないようにはしてくれたのか、すぐに立ち上がってサンダルを脱ぎ捨てると、「よし、眠くなるまで。飲むか！」と笑った。

お酒はそこまで強くないので、その誘いには乗れない。  
そんな思考が横切ったにもかかわらず。

なぜか私はいつのまにか、小さく頷いてしまっていた。

「うっし。それでは晩酌の前に、汗を流そうぞ！」

「あ、えと……」

「なあに、遠慮するな！ 人間の娘よ」

「えっ、まだその神さま設定続いてるんですか」

しかしまあとにかく汗でべたべたで、二人ともどうしようもなかったのだ。

「ねえ、風呂場で息絶えるとかやめてね？」「あの、もしアレなら俺が流そうか？」「ひとりにしてへーき？」「ちよっと不安だな。手伝おうか？」と立て続けに一緒に入ろう攻撃をしてくる初対面にもかかわらず危険な神さままだということを知ったのは、それからすぐだった。もちろん、しっかりと固辞したけれど。

結局、先に彼が入ることになった。

続いてお風呂をいただくことになり、彼はＴシャツとハーフパンツを借してくれた。

脱衣所に入ろうとしたところで呼び止められ、追加で袋を渡される。半透明の袋の中をよくよく見ると、綺麗な刺繍の入ったレースが覗く。

「ちゃんと女物だし返さなくていいから。着てね」

「いや、えっ……。ていうか彼女さんのとかじゃないんですか？  
勝手に……いいんですか？」

「そんなんじやねーよ。この俺にお供物として届いたやつ」

「え？ ……え？ お供え？ えっ？ 本当に……神さまなの？」

頭が混乱してきた。

彼は顔を顰めて、まるで外国人のように両手のひらを天に向けた。

「え、なに。まーだ疑ってんの？ほんとよ。出会って4、5時間の神

さまじゃ、信じらんない？」

整った顔でそう言われてしまったら、返す言葉は無くなってしまう。

けど……お供え？ ……にしては……。

よくある……この……海外製の通販みたく安っぽい半透明なビニール

に袋に入っているから……詳細はわからないけど。

「まあ。つかこれしかないから、勘弁して」

……眉を下げて仕方なさそうに笑った彼に、何も言えなくなった。

「まあ、それは着ても着なくても。それより、ゆーっくり入ってきな？　中リフォームするときに風呂だけにはこだわってっから。なんでも使って」

そう言っって白い歯を見せた彼は、何かあればすぐに呼べよという言葉を残して、脱衣所から出て行った。

「……いやでも神さまって、リフォームとかするのかな……」  
髪を解いて、服を脱ぎながら……そんなバカみたいなことを考えた。

とにかく神んちのお風呂は、結論から言うとなんか最高だった。

一番びっくりしたのが、ジャグジーだ。

じよわじよわぼこぼこいう野太い泡とその圧迫を、これでもかというほど味わった。

だが、そんな天国は束の間だった。

今……私は、混乱の極みにいる。

「なん……なの、これ……」

未開封の袋を開けて出てきたのは、あまりにも心許ない三角ブラとサ  
イドが紐になっているショーツのセットだった。

可愛らしい刺繍はともかく……。

「いや、うっす……くないか、これ……」

……普通こんなもんなの、かな？ ええ……？

自分の着る下着といえば、最安値の量販店で売っているものだ。

モールド加工のつるんとしたカップの、安いブラとショーツ。

どれが先にダメになってもいいように、色が合わなくならないよう

に、同じ色で同じ形を2セットで着回している自分が、センスがどうの  
こうのという類のことは言えないが、……それでも。

「いや限度があるでしょ。なにこれ……下着の意味、あるの……？」  
……いや、背に腹はかえられない。

助けてもらった手前、タダで泊まらせてもらう手前、何もいえない……！

「……うう……！　ちょ、ちょっとしか隠れない……！」

着てみて、鏡に映った自分が、とたんに痴女に見える。

世の女性はみんなこんなの、着るの!?

一度も男性との経験はないし、当たり前がわからないから、わからない！

そう思うと、無駄にそわそわしてしまった。

……ああでも、そろそろ出ないと。心配される。

「——おい。出た？　つまみできるぜ。早く」

ビク——ッ!!　と体が跳ねる。扉の向こうで声がした。

「あッ!　うつ、あ、はい!　いま!　今出ます!」

——うん。きつと、この下着は普通なんだ。たぶん!

よし、うん。どうせこの世も、あと一日だし。

この下着で遺体発見とかされるのは……まあキツイけど。

……まあ、そんなのどうでもいいか。うん。そうね。

彼が貸してくれたブカブカのＴシャツに腕を通しながら、どうにか心を落ち着かせる。

「……ていうか、デカ……。ガリバーすぎる……」

いろいろと思うことはあれど、さっさと濡れたままの髪を束ね、とにかく何食わぬ顔で浴室を出た。

「あ、あの！　ありがとうございます！　お、お風呂すごかったです！」

キッチンで何かを作っていた彼に、開口一番、そう告げる。

「ははっ！　だろ？　二番目くらいに金かけた！」

ゆっくりと彼に近づいてみると、どうやらカルパッチョを作っているみたいだった。

「……なんでもできるな、神さま。

改めて見回すと、キッチンも広く、設備はお金がかけてあるんだろうなというのがよく伝わってくる。

「……あの、純粋に疑問なんですけど。八咫さまって……なんの仕事してるんですか？」

「仕事？　んなの早々に一抜けしてるよ」

「は？」

「……あーまあ、今やってることは仕事っちゃ仕事か」

その不真面目かつ曖昧な回答に首を傾げ、どういう意味なのか聞こうとした時。

湯上がりの私を見て一瞬目を細めた神さまは、微かに首を傾げた。

「……Tシャツ、一番小さいの選んだけど……ぶつかぶかだなあ」

肩部分を摘まれ、目をとろっと細めて……じいっと見つめられる。

「……下着は？　サイズ……大丈夫だった？」

その熱っぽい口調に思わず息の仕方を忘れ、呼吸が詰まる。

「あ、……えっと、いや、あ、あの……あれって」

言いかけた時、玄関のほうで「——おい、やっちゃーん、帰ってるかあ」としゃがれた声があった。

彼がそれに反応して、若い猫みたいに俊敏に、身を翻す。

体が大きい人特有な気がするけれど、ひとつひとつがゆっくりに見えるのに、実際近くで見るとダイナミックで素早い動き。

そして冷蔵庫から、ラップに包まれた皿を出した。

皿に盛られているのは、どうやら刺身のようにだった。

「ヒガジイ！　ありがと〜。急な頼みなのに、ごめんなー」

キッチンから出て懐っこく玄関で迎え入れているのを、台所の襖から覗く。

「いやいや。ちょうど良いのがあってよ」

彼らにとってはきっと日常のやり取りなんだろう。「ヒガジイ、これ  
お礼！ さっきのアジ」「お、いいね。ありがたく」とやり取りをして  
いる。

一升瓶を受け取っている彼の向こうで、玄関先にいたおじいさんと目  
があった。

「……お、なんだ。今日はギャラリーがいるじゃねえか」

「こ、こんばんは。お邪魔しています！」

出て行かないわけにはいかなかったので玄関先まで行き、頭を下げ  
る。

「……なに、嫁さん候補？」

「……へ？ ちが」

「ははっ！ そーなのよ！ よろしくね」

ギョーンと首がもげるほど全力で彼を見たら、目が合う。

……いや、適当にも程があるよ？ 否定しよ？

そう目で訴えたら次の瞬間、強い力で抱き寄せられる。

「ううわあっ！　ちよっ……!!」

「もーひと目見てさあ、こいつだ！　ってズバギャンッ！　ときたわけ」

——…ず、ずばぎゃん？

腕の中から思わず彼の顔を見上げる。「な？」　って顔をしていた。

……は、はあ？

「あー、俺も昔やばーさんにそう思ったもんだ。いいもんだなあ。ま、仲良くやれや」

え!?　ずばぎゃんっていいものなの？　てかずばぎゃん何？

「ああそうだ嫁っ子。朝涼しいうちによ、トマト取りに来いや。いいのができてんだよ」

困惑していると、ヒガジイさんは思いついたようにそう言った。  
嫁っ子って私に言っ……るのか？

やたらと目が合うんだけど。

「ええと……あ……は、はい……？」

「やったね！　じゃー明日の夜は冷やしトマトもしてね、嫁っ子」

「いや呼び方」

体を引き剥がそうと躍起になる私、そして彼はそのままむぎゅむぎゅしているというやりとりにはお構いなしに、「そいじゃなあ、おやすみ」<sup>み</sup>とヒガジイさんは玄関をゆっくり閉めて、エンジンがかかったままの軽バンに乗り、ばびゅんっ！　と帰っていった。

「……い、田舎のおじいさんって……あ、アクティブですね」

「なー。あの人ね、比嘉じい。取り寄せる酒と、育ててる野菜を買ってる。もうすぐ八十歳らしいぜ」

「ええ……？　全然見えな……ってそうじゃない！　なんですか  
嫁っ子って」

「あっはっは！ まあまあ。ほら、これ。さっき嫁っ子が風呂つてる間に頼んどいたんだよ。いい酒よ？ 飲もうぜ。最後の晩餐ならぬ、最後の晩酌〜」

「えっ、だ、だから呼び方……」

「ん？」

長身の背を丸めて、顔を覗き込まれる。

「そんな気になる？ 気に入った？ マジで結婚する？」

透き通った目を緩ませてにこにこしている彼に戸惑って、顔に熱が集まった。

「そっ……！ そんなことしたら、八咫さまも一気に負債者ですよ」

「ははっ！ 『夫妻』なだけにな〜！」

いや誰が上手いこと言えと。ていうか、神さまって結婚するの？

揶揄われているのはわかっていのに、今の自分には裂傷ダメージが大きい。

確かに飄々と、何を考えているのかわからないところはある意味神さまに近いな……というより、やっぱり人外感が強い……。

本当にこの人、何者なんだろう……。

軽快にキッチンに戻る足取りを、慌てて追いかけた。



……やばい、酔ったかもしれない。

そう思ったのは、比嘉じいさんのお酒で乾杯してしばらく、三杯目を飲んだあたりから、だった。

「……あの家、片付けきいたら売れると思いますかあ……？」

広いリビングは畳の和室で、ローソファともいえるような硬めのロングクッションが敷かれている。

「あれ。やっぱ売っちゃうんだ」

うん、とゆっくり頷いた。

四杯目から飲むペースを落として涅槃像のように寝転がった八咫さんは、座る私の顔を見上げて、眩しそうに目を細めている。

彼も、眠いのかも。

「お金作らないと……当面の返済生活が……。たぶんお母さんもう帰ってこないと思うし……」

「……まあ、帰ってきててもなんも与えるべきじゃねえし……。確かにそうだな。売るのが手っ取り早いかな」

「ふむう、けど、売れるかなあ……」

「ま、島の人間、今結構頑張ってるから。移住者も最近は増えてきてるし、すぐすぐとはいかずとも、時間をかければなんとかなるだろう」

彼の『時間をかければ』という言葉で、急に休暇をとっている職場のことを思い出した。

こんな自分を雇ってくれた、従業員七名の小さな会社。

この先まだ生きるという可能性を、自然と口にしていてぞっとした。生きることを安易に選ばば、辛い地獄が続くのだ。

「あそつか。……有休、終わっちゃうなあ……ああ、気まずう……」

「……ああ、彼氏と一緒になんだっけか、職場」

「あ、もう彼氏じゃないなあ……」

「元、彼ね」

「とはいえ、まだ付き合って二週間だったんですよえ。生まれて初めての彼氏だったけど、言うほどなんもなかったし……、なんもされないうちに、終わったなあ」

さつきから、ぐちぐち言い続けている。

「……手え……出されたかった？」

「……いやあ……」

彼がこちらを見つめている気がした。

無駄にドキドキしそうで、あえて見返さなかった。

「……逆に……出されなくてよかったかも、ですね。未練残りそう」

「……そっか」

まあ何にしても、どう見積もっても、私の人生……お先真っ暗だ。

きれいに盛られていたカルパッチョはつつかれて、あと二切れ、お皿に残っている。

「……やっぱり……、明日、私、……崖の上、行きます」

それをぱくりと口に入れた。

オリーブオイルが絡むアジに、レモンの爽やかな酸味と香りが抜け、一緒にいついてきた水菜もパリパリだ。

「おいし……。最後の晚餐、贅沢です。欲しいもの……なーんにも買えなかったけど、最後にこんな美味しい命をいただけで、しあわせ」

お酒を飲みながら、こちらを見つめている彼の視線には気がついているけれど、しばらく見ないでいた。

でもそれをずっと続けるわけにはいかない。

それは礼儀だと思った。ゆっくりと、彼に視線を返す。

「……ほんとに、ありがとうございます。八咫さま」

彼はこちらを見つめたまま、黙っていた。

表情は笑っていなかったけれど、かといって怒っているようにも見えなかった。

「……今日は自分として過ごす、最後の日です。清潔で雨風凌げるところで一晩過ごさせてもらって……、話も、いっぱい……聞いてもらえて……」

こんなたくさん、誰かに身の上を話したのは、初めてだ。

「……いやいや。俺がわがまま言っ、て、お前の一日をくれーって頼んだわけだから。こちらこそ」

あの崖から降りて、ずっと引っかかっていた。

そこなのだ。本日最大の謎。

「……八咫さまは、……あそこで人助けをしてるの？　ですか？」

頭がぼんやりして、敬語を忘れる。あわてて付け足した。

口にしながら少しだけ緊張して、酒が胃の奥で強張って止まる感触がした。

……私、何を期待しているんだろう。

崖で出会って今まで、彼は私が死を決意していることに対して、いつさい口を出さない。

聞くのが怖かったのに、酔いなのか、口が滑った。

彼は「へ？」とポカン顔をする。

「……ほら、神さまだし、こんな感じで崖っぷちに立つ死んじやいそう  
なやつに、毎日こんな施しをしてあげてるのかなって」

眉を顰めた彼は、涅槃像の姿から起き上がりその場で胡座をかくと、  
心底わからないと言わんばかりに首を傾げた。

「いいや？　なんでそんなことしなきゃなんねーの。赤の他人に」  
「え、じゃあ……なんで、助けてくれたの……」

言うか言わないか考えているうちに、頭で考えるより先に口に出してしまった。

彼は、グラスに残っていたほんの少しの酒をあおる。  
それから流れるような仕草で、私の顔を覗き込んだ。

「……なんでだと思う？」

挑戦的な表情で問われて、全く言葉が思い浮かばなくて首を横に振る。

「あそこはたしかに、俺のガキの頃からのお気に入りのお気に入りの場所だけど。身投げするだろうーなって奴はさ、心も何もここに無くて、なんか既に……あつちにいつちまつてる感じ。やっぱ顔つきは違うワケ」

——そう言われて、ふいに頬を大きな手のひらで包まれた。

ゆらゆらとしたその目に見つめられ、どきん、と静かに胸が鳴った。

あ、熱いな……この人の手のひら……。体温、高……。い……。

「……それに、こんな澄んだ目は……。してねえよ」

目の中を覗き込まれる。

何もかも見透かしているようなその表情は、爪を隠す鷹みたいだ。

囚われた獲物って、こんな気分なんだろうか。

顔を傾けて近づけられ、何をされようとしているのか気がついてしまった。

あわてて顔を逸らしたものの、頬をもったままの手のひらが顎に移って、そのままきゅっと正面を向かされる。

「……イヤ？」

真っ直ぐに、乞うように問われる。

「いやじゃないけどあの、したこと、なくて……びっくり、して」

彼は、空っぽの表情をした。

「え、そうなの？ あれ、でも彼氏……あ、そっか。って、キスもしたことなし？」

答える義務はなかったけれど、とりあえず首を横に振った。

「……ていうかそもそも、あんまりこういうこと自体に、縁がなくて慣れてないんです。……ごめんなさい」

キャパを超えることが起きそうで、酔いが十パーセントくらい醒めた気がする。

「……あらま。これを知らずにこの世を去ろうとしてるとか、あまりにももったいない。死んだらできねえんだから」

彼の視線が、私の唇に移る。

「……びっくりするくらい……気持ちいいよ」

まるで、唇に話しかけるように、甘やかな声で彼はそう言った。

「そ……そう、なの？」

「そうだよ。……あー、ちよつといい？」

そう言っ、ごくごく自然な仕草で、彼はそつと頬に唇を置いた。少しだけ、ほっぺたにきゅ、と吸い付かれた感触。

「え……」

ちゅう、つと音がして、唇が離れた。

「ほら、どう？ 嫌じゃない？」

「……うん……、い、いやじゃ……ない」

「ふ、そりゃよかった」

一秒先がどうなるか分からず、さつきからドキドキが止まらない。

彼は優しく笑って、今度は唇同士ををゆっくり重ねようとしてきた。

「……ッ！ 待って待って！」

はっと我に返って、お互いの唇の間に手のひらを挟んだ。

「あ、の……、なんというか、別れ……振られたばかりで、その……

こういうのダメなんじゃないかなっていうか」

今さら、自分でもよくわからない取り繕い方だなと思う。

直感で、自衛反応が働いてしまった。

「……そっかあ。けど明日死ぬんじゃないやその倫理観みてえなやつは要らねえんじゃないかとも思うけど」

確かにその通りだ。

「嫌じゃねえなら、今日しかチャンスなくね？ 味わうの」  
でも、チャンスってそれは、……どちらにとって、だろう。

「え。こ……、後悔、しないかな……、お、お互い」

「それも明日にや海の藻屑だな。けどもし……後悔させたその時は、連  
帯責任で俺も一緒に飛び込む」

「そっ……！ そんなまさか！ いいよ！ 巻き込みたくない！ い  
い」

そんなことしないで、という意味で慌てて首を大袈裟に横に振る。  
彼が困ったように眉を下げ、やさしく微笑んだ。

まるで一緒に飛び込めないのが残念、といわんばかりに。

どうしてそんな、まるで傷ついているような表情をするんだろう。  
本気なのか嘘なのか、わからない。

大きな温かい手のひらで、後頭部をやわらかく撫でられた。

それから、おでこにキスをされる。

嫌じゃなかった。

むしろ心地よくて嬉しくて、あわよくば……もつとしてほしい。

そのやさしい仕草が……まるで引っ掻き傷みたいに、きっと海の底で息を引き取るまで、未練たらしく残る気がした。

……もう早々に、後悔の予感。

「……まあ、もったいねえなとは……思う。本音言えば、お前がお前を捨てるんなら、そっくりそのまま……俺が貰いてえくらい」

いったいその言葉を、どう捉えるべきなのか。

あまりに予想外の言葉を受けて、答え方がわからない。

それでも、彼の言葉と表情は抗えないほどやっぱり素敵だ。

躊躇う理由なんて何もない気がしてきた。

「……そのくらい、俺にとっては良い夜だったこと。……あのさ」  
ふいに、後頭部に置かれた手に引き寄せられた。

唇に柔らかいものが、ふにつ……と当たる。

……えっ!?

思わず目をかつ開いた。

『あのさ』の続きがあると思っていたから、油断していた。

——生まれて初めての、キスだった。

……あつ、……たか……。やさしい、感触……。

唇が離れて、鼻先がくっつきそうな距離で見つめ合う。

酒気の混じった息は、お互い様。

それなのに……不思議なくらいに、不快がない。

「……もう、振り返なくていいよ。今だけ見ればいい」

不意に後頭部にあった彼の手が、束ねていたヘアゴムを引き抜いた。

「あ……」

僅かに濡れたまま冷え切った髪の束が、熱った頬に降りてくる。

「髪も乾かさねえまま束ねて……、ドライヤー、脱衣所に置いといたのに」

はっとして、無意識の女子力の低さに一気に羞恥が跳ね上がる。

「これ、いつもだろ。今までどんだけ自分のこと、後回しに……ないがしろにしてきたんだよ」

中学から使っているドライヤーが壊れて、買い替えるお金がなかったから、長いこと自然乾燥を余儀なくされていた。

そんな習慣が当たり前になるくらい落ちぶれた生活をしていることに、気が付かなかったこと。

それが急に情けなくて、見透かされてしまったことがひどく恥ずかしい。

「う……！ うるさい、や、めてよ」

「ほれ、いーから」

彼が、自ら首にかけていたタオルを引っっこ抜く。

それから私の髪を挟んで、それでぽんぽんとやさしくたたいた。  
昼間は野生児みたいなのに。

……むしろ乱暴にされたほうが、よっぽど楽なのに。

そうはせずに、気がついたところを大事にいたわってくれるのが……  
苦しい。

同時にこみ上げてきたのは、……これまで感じたことのない、いい表  
せないほどの多幸感だった。

「……よく頑張ったなあ、今まで。なあ？」

その低くて静かな声に、じわじわと瞼に涙が溜まる。

「……なに……なんで……」

なんで……なんだろう。

……私、今さらなんで、こんな優しい人と出会ってるんだろう……。  
タオルを挟んで頭を両手で包まれて、きゅっと上を向かされる。

「……偉かったなあ」

そう言い終わる前に、瞼に溜まった涙をちゅる、と吸い上げて舐められた。

な、なに……、え、信じられないことする……!!

驚いたまま至近距離の彼を見つめていると、顔を傾けた彼は、唇をゆっくりと重ねてきた。

キス、というより……、舐めている。

まるで野生の獣が傷をいたわるように、彼は私の唇を見つめては、ふわつと唇を触れさせ、丁寧に繰り返して舐めた。

下唇に、ぬくもりを塗り込むようになぞられた。

生まれて初めての感覚に、全身がびくつと跳ねる。

……参った。

荒廃しきった自尊心の上から、無償でよく効く薬を擦り込まれているみたいなの。

「う……う……」

「……ヤじゃない？ ……もつと、愛していい？」

「そ、そういうの……ッ、誰にでも」

「言わねえわ。崖に誰がいても助けない。基本は」

「……」

「……ははっ。こんな寂れた神さまじゃ、信じらんねえか」

そう言って、視線を落とした彼を見る。

……本当に、どうして……いちいち傷ついた顔をするんだろう。

慌てて取り繕った。

「……信じる……、信じますから、お、落ち込まないで……」

「……いやあ明日死ぬやつに情けかけられてもな……。ま、力もなんもねえし、こんな末席の俺じゃ信仰心を集めるのも一苦労だからなあ……」

……本当なのか嘘なのか分からないのに、なんだか……こっちが悲しくなってくる。

「……そうなの？ 本当だよ、私は信じるよ。だって今日、声かけてくれたもんね。うれしかった」

彼をぎゅうっと抱きしめた。「んうゝ……」と苦しげに彼が唸る。

「……力、出る？」

「……そんなもんじゃ出ねえな」

「あ……だめ？ ごめん……」

「頭バカになるくらいのエロいちゅーしてくれたら、出るかもしれん」

「……やっぱり神さまじゃないですよ、八咫さまって」

「……俗世が長えもんで」

彼の肩口で思わずふふ、と笑った。彼も少し笑った。

彼を抱きしめながら、思う。

もう彼が何者だとしても……、神さまだって言葉で騙されて、信じたまま。

この集大成のご褒美みたいな夜に、甘んじて乗っかるべきだと。

「……八咫さま、あの」

「あ、まだ敬称略さず呼んでいただけのね」

「『頭バカになるくらいのエロいちゅー』ってどんなのか、経験不足でわからないので、……あの、お手本してくれますか？」

彼の動きが止まった。

それから、身を少しだけ引かれる。

抱きしめていた体がわずかに離れた。

「……じゃあ、口開けて。目は閉じないで、見てろよ？」

ごくんと息を呑み……小さく頷いたあと、唇を薄く開いた。

彼の顔が近づくのと同時に、反射的に目を閉じそうになるのを必死で抑える。

あー……と彼が口を開け、赤い舌が出てきたとき。

口そのものをはむっ……と捕らえられる。

「は……、う……」

何度も絡みついて吸い付いて、独立した生き物みたいに蠢く。

舌の側面を撫でられて、ひくんっ、と体が跳ねた。

足先に力が入る。

目の前の整った顔は、こちらを緩やかにとらえたまま。

舌が、もっと奥へ入り込んでくる。

少しだけ息苦しくて、激しさに怯んだ。

彼の舌に刺激をされるたびに、じんと腰骨のあたりに甘い痺れが伝わる。

神経が、強くつながり合っているのかもしれない。

「んん……っ、ふ、うっ……♡」

「……はあっ……もっと、あけて」

底なしに甘い声と吐息にわけのわからない恐怖感を覚えて、反射で抵抗しようと手を動かした時、パシッと掴まれた。

差し込まれて絡んでいく彼の大きな指先が、指の間を撫でられるだけで声が出そうになる。

にぎにぎされる手が、大きなそれに全部包まれた。

あたたかくて、ほっと息をつく。

長くて熱い舌が歯列をなで、上顎をくすぐった。

「ん、う……！」

……き、きもちいい……、キスって、こんな気持ちいいんだ……。

ぴちゃっ……と漏れる水音も、指先で手を撫でられたり、反対の手でも髪を弄られたり、耳を撫でられたり。

どこに神経を集中させたらいいのか、わからない。

「う、んっ！」

かじ、かじ……と、舌を甘噛みされて、反射的に引っ込めようとしたら、逃がすものかと絡め取られた。

……な、にこれ、舌、食べられる……！

「は、あぐ……う、ん、う♡」

髪や手のひらを撫でていた両手がぎゅっと体を抱きしめ、服越しにそっと身体を摩っていく。

背中……肩、二の腕、行ったり来たり。

少しずつ、すりすりと。

手が辿った場所に、あたたかさが余韻のように残っていく。

消えないうちにまた同じところを摩られて、ぬくもりが置いていかれた。

「はあっ……う、あ……♡」

太もも……ふくらはぎ、膝の裏。

ちゅくつと音がするくらい舌を絡ませながら、身体の上を温かな手のひらが滑っていく。

触られ慣れていないので、思わずぴくん、ぴくんと跳ねる体が恥ずかしい。

不意にお尻を撫でられ、むきゅ、と少し強く揉まれた。

「ひ、あ！ や、だ」

「なんで。これまで頑張ってきたお前の体を、今労つてるとこなのよ。邪魔しないでくれる？」

手のひらが太ももに戻ってきて、間にゆつと差し込まれる。

「っ、あ……ッ♡」

「ここはあとでゆー……っくり、ふわっふわにしような……」  
すりすりっ……と恥丘をよしよしされた。

「ん、っ♡」

どんな風に触られるんだろう、と思わず想像してしまつて、目を逸らす。

……どうしよう、すごく気持ちいいけど、ほんとに、……この人と、  
しちゃうのかな、今夜……。

したこと……ないのに。でも……。

長いことキスをして、すっかり緊張は解れていた。

唇はいつの間にか首筋に移る。

手は借り物のTシャツをゆくりと押し上げた。

「……あ、へえ。こんなバカっぽいエロ下着だったんだな……コレ」

それで思い出した、いま私は彼が手渡してきた心許ないうつすい三角ブラを着ているということ。

「あ、え、や、やっぱりこれすごいやつだったの!」

彼はきょとんとしてから、すぐにしらじらしく首を傾げた。

「……いや? 普通じゃない?」

「いまさっき『バカっぽいエロ下着』って言った!」

「あ? そーだっけ」

明後日の方向へ視線を逃した彼に、口を引き結ぶ。

「や……やっぱえっちなやつなんだ! わ、わかんないから着ちゃったじゃん! そっ! そもそもなんでこんなの持ってるんですか!」

ぽかぽかとその厚い胸板を殴ってみても、大きな体はびくともしなかった。

「あー、これ？ よくある通販の、オナホのおまけで付いてきたやつ。なんだろうな、なんのコンセプトかは俺にもわかんねえけど。よかったじゃん、役に立って」

よ、よくない！

「ばかあ！ やっぱぜんっぜん神さまじゃない！」

あまりに恥ずかしくて、Tシャツを下にぐいと引き戻そうとした手を止められた。

それからまじまじとそこを凝視される。

「はいはい。ええと……？ どれどれ」

「ちよっ……やだ！ 見ないで！」

「んー……」

「ちよっ……聞いているん……、うん、んッ♡」

ぢゅうつ、と三角ブラごと、口に含まれてしまった。

「あっ……ああっ♡」

「ん、ふ……、かわいい♡ いい声でるじゃん」

じゅわじゅわとブラが唾液で湿って、不意打ちで固くなってしまった乳首に擦れる。

ブラ越しの舌の熱さに刺激されて、腰が揺れた。

「……っ、は……、あら……腰、動いてんな。けっこう好きだろ、こういうの」

「わ、わかん、ない……」

「わかんねえ？ 多分、今の感覚はいい感じって覚えればいいよ。じゃあ……ぜんぶ、分かるまで試そうな」

ころころ……と舌先で転がされ、意図しない甘い声がどんどん我慢できなくなる。

「あ……ッ♡ あっ♡」

もう片方はあっけなくめくられ、全体を撫で回された。

ゆっくりと揉みしだかれ、中心もピン……ピン♡と刺激される。

それでも、舐めしゃぶるのは止まらないけれど、触っていない方の手は背中を繰り返し撫で摩っていた。

それで背中がジンとして、胸をせり出すように突き出してしまふ。

「ん、……食べやすい」

くちゅつと音を立てて、柔らかい舌がいつの間にか直接乳首を舐っている。

「へ……？」

な、なんで？ ブラ、着てるのに……直に感じるの、なに？

「……んふ、みつけちった」

目が合った。

カシユクルののように重なり合ったところから、乳首が直接出せるようになってる。気づかなかった……。

……ていうか！ な、なに、このデザイン！

「着たままで……ん、む……、しちやえそうだなあ」

「う、んう！」

少しだけ強く、鋭い感覚にきゅんと膣が締まる。

かり、かり……♡ と甘噛みされた。

「は、あ、……？ やだ、それ、や……♡」

「あ、すき？ これ」

かみかみされて、腰がまた甘く痺れてくる。

「あ、あ♡」

こりこりとした感覚と、いつ強く噛まれるか怖い感覚。

「……はあ……、おっぱいやらか♡」

それをなぜかどこか期待してしまっている自分と、ずっと跳ね続ける

下腹部のジクジクする感覚。

ぜんぶきもちよくて、ぜんぶこわい。

「はう、……んう、あっ……♡ あっ♡ ああ……！」

歯で捻られる感覚に何度も膣がひくついた。

こんなの初めてで、……やっぱりすごくこわい。

や、やだ……♡ 膣みちぎられたら、どうしよう……！

「は、あうっ♡ ああ、やあっ……♡」

彼は視線だけをこちらに向けて、楽しそうに目を細めた。

すす……っと腰骨のあたりを、手がすり抜けて背中回る。

な、……なんか、へん……！ やだ……！ ぞくぞくって、する……



「あ、あ……♡ え……!? なん、なに、え……」

かり、かりと甘噛みされるうちに、どんどん何かが昂ってくるのを感じる。

「待っ……、あ、……！ やたさ、へん……、なんか……！」

彼は何度も激しく吐息を漏らして、せわしく口を動かした。

くちゅっ、くちゅっ♡

音を立てて何度もえっちな視線のまま吸われる。

何度も甘噛みされ、先端が彼の唾液でてらてらとしていて……。

「あッ……♡ あ、あうっ——♡」

ぞくぞくぞくう……っ！ 唇が戦慄き、腰と背中が反れて……何かが突き抜けた。

止めようがなく、とろ、とろ……♡ と愛液が溢れる。

「あっ……♡ つ……っくっ、……ふっ、う……♡」

ひくん、ひくん……♡ と余韻が残っていた。

「え、あ……あれ、甘イキ？ ……つか、まじイキじゃん」

——え!? お、おっぱいだけでいけるものなの!? こ、これいつたって……、こと……!?

「へえ……！ うわあ……えっちなねえ……」

心底楽しそうにニヤニヤする彼と、視線がかち合う。

言い返したい。だけど言い逃れできないくらい、体に入っていた無駄な力が全部抜け切った感覚があつて、ぼんやりしている。

お酒のせいかもしれないけれど、それだけじゃない。

……どうしよう、……こんなに、触られるのって、気持ちいいの？

「……気持ちよかつた？」

そう問われ、

「うん、……す……ごく、きもち、よかつた……」

と素直に返してしまうくらいには。

「ん……そっか。これが……生きたままでも天国に行く方法のひとつな」

八咫さんはそう言うと、ふう……、と肩が下がるほど力の抜けた息を吐いた。

その間に、大きな手がするすると太ももの内側を這っていく。

「はう……あぁっ……♡」

「ん、かなり声出るようになったなあ。もつとよくなるよ、こっから」  
「ふ、……うう……！」

「ここも、どんなかな。……確かめてみよっか？」  
頷く前に、手がゆっくりとそこに入り込んでいった。

「あ、あ……♡」

「あ、これ……、パンツもか。ああ、なるほどね……」

「え……？ え、なに……」

「ん……？」

ご機嫌な顔で曖昧に返され、長く太い指先が、するりと足の付け根をたどる。

「こういう……ことッ」

「え、……!? ん あっ♡ ううっ♡」

ショーツは履いたままなのに、上からなぞられているのに。  
熱くて、直接触られている感触。

くちくち……っ♡ と音を立てられ、熱い指で割れ目に沿って撫で上げられた。

「く……っ、あっ♡ ああ……は、あ……♡」

「脱がさなくても……くちゆくちゆできるやつ。べんり」  
泥濘んだ入口を、わざと音を立てるように何度も撫でられる。

「は、ああ……、あん……ッ、うう、やあ……っ♡」

「いーい声……あー……はは、すごい音。きこえる？」

くち♡ くちゆ……♡ くちゅっ……♡

羞恥に耐えられず、じわつと涙が溢れて首を振る。

はっ、と笑って、「ん、……どう、かなあ」とそつと甘く声を出した  
彼が、慎重に指を差し込んだ。

「んッ……♡ ふ……、うう……♡」

「よしよし……だいじょうぶ。力、抜いとけ」

「ん……♡ んあ……♡」

「そうそう……すげえ上手。そのまま、な？」

ぬにゅ……♡ 探るような指の動きにとらわれそうになるのを、気がつくたびにいなして、力を抜いていく。

ローソファの縫い目を、思わずギュッと握り締めた。

……体が彼の指が中に挿入のを、ゆっくりと……許していく。

……ああ……♡ なにこれ、……ぞくぞくって、するう……♡

「うっ……♡ ん、……くうっ……♡」

「うん、良くなってきた？ まだまだ力抜いとけよ」

背中から腰をゆっくりと摩られる。

そしてだんだん、ぬちゅ、ぬちゅ……♡ と出たり入ったりする感触

に、慣れていった。

「は、あ……♡ あ……♡ あ、んっ♡」

「ん、……ああ、声かわい……」

言いながら余裕なく微笑んで身を屈めた八咫さんと、唇が重なる。

「んん……ふ、うッ♡」

明らかに興奮した彼の勢いに圧倒された。

舌をこれでもかと巻きつけ合う。

吸い付いて絡まって、頭の奥が痺れてしまうような、そんなキスだった。

……ああ……、ぜんぶ……熱い♡ 気持ちいい……ッ♡

くちっ、にちゅっ……♡ ちゅっ……♡ ぬぢゅ♡

どこがなんの音を立てているのか、もうあまりわからない。

膣が甘く甘く痺れていき、唾液が垂れる。舐め取られる。

「ああ……♡ は、あ♡ あ……！ ん♡ うう……♡」

「もう、すこし……奥、んむっ……はあ、してみよっか？」

キスをして顔を見つめられたまま、ぐいつ、と体ごと入れるように、

指が奥に差し込まれる。

「ううッ！ ん、ああ……っ♡ はっ、ああ……んっ♡」

お尻に入りそうになる力をなんとかいなし、深呼吸をしながら、ゆるりと力を抜く。

すると痺れるほどの快感が、身体の中から弾けるように広がっていった。

ごつごつした長い指が、ぬるゝ……っ♡ と引き抜く寸前に、また優しくぬちゅう……♡ とたっぷりところところを絡めながら奥へ挿る。

「はあ……あ、あう……あ……ああゝゝ……♡」

ちゅこ……っ♡ ちゅこ……っ♡

あ……！ 指、入ってる……♡ 出たり……入ったり……してるの、えっち……♡

ゆっくり……ゆっくりと、丁寧に解されていく体が、どんどん甘くじいんと痺れていく。

「んう……ああ……♡」

もうさっきまで抱えていた恐怖心は、消え失せていた。

もつと、この先が……知りたい。

「きもちいい、あ、……ああ……♡ きもちいい……♡」

「うん、はあ……、よかったなあ」

「ん、う、もつ、もつと……」

「ああ、んふ。もつとな？ おけおけ」

「ん♡ うん♡ あ、ああう……♡ ん♡ んッ……♡」

「ふ……、大ハマりだ。イク？ イきたいよな」

わからない、だけど、このままされていたらいくのかかもしれない。  
涙目でゆっくり首を横に振る。

「どうだろ……初めてだし、うまくイクイクできるかな。んー……」  
指の角度が変わった。

「あっ……!? あ、あ……う♡ それ、あ」

「……ここもいいのね？ こっちは？ もうちょい奥もいけるけど」  
かりかり……♡ と上を擦られる感覚にびくんと体が跳ねる。

彼が視線を合わせて、ニヤツとした。

「お、ここかぁー……んふふ」

一瞬、ぴんと弾けるような感覚が走る。

じりじりと、どこかに駆け上がる感じ。

——……ああ、これ、やばい……♡ う、くっ……♡

「あ、あ……♡ そ、そえ♡ ああ♡ ああ……♡」

ひとりでに、ばかみたいな声が漏れた。

「……いいね、いっぱい甘イキしてる。ここは？」

さらにぷくんとした奥の何かに、微かに指が届いた気がした。

あっ、う……♡ これなに……、あ、いちばん、だめかも。

「は……♡ あ……♡ それ、……い、や、とめ、……へ、え……あ♡」

じりじりとした痺れが、どんどん迫ってくる。

それなのに私の声を聞いても彼は、指を止めるなんてことはしなかつ

た。